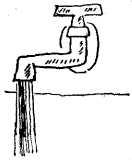
★講演

三つ子の魂



（上）

外山滋比古

教育のはじまり

よく、鉄は熱いうちに打てということを申しますが、人間らしくなって行く過程を考えてみますと、学校は、既に鉄が固まりかけたところで鉄をたたくようなことをしていると思います。小学校に比べますと、中学校はもっと固くなりまして、高等学校へ行きますともっと固くなってしまう。大学では全く冷たくなっておりまして、たたけばカチンカチンと音がしてハンマーがはねかえる、という位に陶冶性が落ちております。〝大学〟というといかにも学問がありそうですが、いわば世の中をあざむくものであると思います。本当からいえば、小学校に大学校という名前をつけて、大学に無学とか小学とかいう名前をつけた方がよろしいわけであります。その小学校よりもっと大事なことができるのは幼稚園でありますが、どういうわけか〝幼稚〟という言葉はろくな意味がありません。〝幼稚〟だというのは決してほめ言葉ではないわけです。で、〝幼稚園〟という名前が甚だよろしくないと思うのです。幼いころの一年、二年というものは、大人になってからの十年、十五年にも匹敵するようなことをなしとげることができる、と私は思うのです。鉄は熱いうちに打て、という諺にひっかけてみますならば、まだ溶鉱炉から出したばかりの、あめん棒のように自由に曲る鉄であろうかと思います。そういう意味で、皆さん方は、大変、大事な教育をしていらっしゃるわけであります。

しかし世の中は、本当の教育ということを考えていないところがありまして、小さな子どもには大したことはできないのだ、と決めてかかっております。ことに、教育を、子どもが歩いて学校

へ行かれるようになるまで保留しておくような考え方、家庭では教育はできない、生まれてから幼稚園へ行くまでは教育らしい教育はしなくてもいいのだというような考え方が、ごく最近まで一般的でありました。これは十九世紀の貧しい社会が考えておりました〝教育〟であります。十九世紀の社会は、ヨーロッパでも、社会が教育に向けられる経済力その他が十分でありませんでしたので、学校はきわめて少なく、先生も限られておりました。したがって、先生の方が子どもの方へ出向いて教育するようなことは、考えられません。歩けるようになった子どもが危険なく学校へ通えるようになった時に、一か所に集めまして、一人の先生がたくさんの子どもを一せいに教える、という現在の学校という制度が確立したわけであります。現在のように社会が教育に関心を高めてまいりますと、当然この十九世紀のように、子どもが学校へ通うまで教育を見送ることには反省が加えられなければならないのです。しかし長い間の習慣は恐ろしいもので、現在でもやはり、こういうふうに思いこんでいるわけであります。

そこで、人間の成長、発達ということを中心に考えて教育をもう一度反省して見ますと、小学校へ入学するまで教育ということをおろそかにしておくことは大変危険であり、勿体ないことであり、非常にまずいことであるのがわかるのであります。

最近は幼児教育ということが注目されて参りまして、これからかなり大きな、良い変化が幼児教育に見られるだろうと期待いたします。しかし正直なことを申しますと、幼稚園でも遅すぎるのであります。いつから教育を始めるのかと申しますと、生まれたその瞬間から始めなければならないであります。さらに生まれた時からでも、すでに遅いのであります。本当の教育には、生まれる前から、生まれて来る子どものためにお母さん方が心の準備をすること、どういうふうに育てるかという勉強をすることが必要であります。昔の人は〝胎教〟ということを申しまして、子どもが生まれることになりますと、部屋に能面をかけたりして精神の安定をはかる、精神修養をして生まれて来る子どもが立派な子になりますようにと願ったのであります。現代においてはもちろん、能面を部屋にかけたりするのでは十分だとはいえませんが、母親がしっかりした育児に対する見識をもち、覚悟をもっているかいないかによって、その子どもの一生は大きく変ってくるはずであります。私は、現代の教育において最も大切な問題点は、母親が一人の人間の一生を決定するような重要な時期の教育の、唯一の責任者であり、担当者であるという自覚がないということにあると思います。したがって、きわめて重要な問題が放置されたままになっております。これからのお母さんたちがしっかりした

自分の子どもの教育をするにはどうしたらいいかということが、早急に研究されなければならないと思います。しかし、その実現には、長い時間が必要であろうとも思います。

子どもの、子どもばかりではなく人間の基本的な教育としましては、母親が子どもをひざの上であやしながら行う教育が、ほかのとは比べものにならないくらい重要でありますが、このお母さんたちがそのための教職の単位もとっておりませんし、教育実習もしていないような先生でありながら子どもを育てているわけですから、この結果がうまくいくとすれば偶然であります。もう一つは非常に愛情があるために、素質も、資格も、経験もないのを補って何とか大過なきを得ておるのであります。大学でいろいろなことを勉強されたような若い女性にしても、育児と関係のないようなことはよくご存知ですが、生まれたばかりの赤ん坊に最初にどういう日本語を使ったらいいかということを知っている、あるいはそれを考えたお母さんは、残念ながら一万人に何人、ぐらいしかいらっしゃらないのではないかと思います。大学で国文学を卒業されて源氏物語の敬語というようなことには詳しい研究をされたような人でも、赤ん坊の父親に〝パパ〟というような言葉を使って平気でしょう。とすれば、少なくとも子どものための日本語の先生としては、不適格であるかもしれないということになるのであります。なぜパパがいけないかということはあとで申しますが、ママはよろしいのですが、パパがいけない、いけないということを感じないというのは、そのお母さんの日本語の語感がおかしいからであります。そういうお母さんが赤ん坊に日本語をしゃべりかければ、赤ん坊の日本語がおかしくなってくるのは当然でありましょう。

言葉の教育によって人間的形成ができるとすれば、人間の形成の基本的なところでかなり欠けているということを認識した上で、少し手遅れではありますが、幼稚園で直していくことができれば、子どもたちにとって将来最も感謝すべきは、母親よりも幼稚園の先生であったということになるかもしれません。

三つ子の魂——母乳語

人間を決定するような教育というのは一体何であるかなどというと、非常に難しいような感じをもたれるかもしれませんが、そうではないのであります。簡単なことでわれわれの一生が決まってしまう。それが〝三つ子の魂〟というものです。〝三つ子の魂〟という言葉もどこか古風でありますが、人間の一生について回る個性とか、人間の中核的な考え方というようなものだと言っても

よいのです。

あえて、三つ子の魂ということで話を進めていきたいと思います。

生まれてきました赤ん坊は、何も言葉を聞いたことがないわけです。そして、生まれた瞬間からいろいろな音や声がきこえてくるわけです。自動車のクラクションもテレビの音も、雨戸を閉める音も人間の声も、区別ができないでありましょう。そのうちに、人間の声と物音とが区別できるようになります。そこは人間の能力が非常に高いからでありまして、普通の機械ですとこの区別は困難であります。非常にうるさい、地下鉄のような所で友だちと話をします。話はできます。それを録音してあとで聞いてみますと、まるで会話が聞きとれないのであります。なぜかというと、テープレコーダーは電車のうるさい音と人間の声を同じように録音しているからです。ところがわれわれの耳は、モーターの音や騒音というものをおさえて、相手の話している言葉を拡大して聞いております。こういう情報を選別する能力というのが人間にはあるわけです。その能力は赤ん坊のころからだんだん発達します。その中でもお母さんの声をまず最初に認識します。そこでお母さんのいうことに特別な関心を示します。このお母さんと赤ん坊の間に見られる会話、これが人間の言葉の教育の最初の入門期なのであります。したがってこれを私は〝母乳の言葉〟というふうに呼んでおります。生まれると赤ん坊は、母乳をもらってどんどん体が大きくなっていきます。体が大きくなるだけでは動物的な成長であって、これが精神的に、知的に成長していくには、母乳だけではだめで、心の糧が必要であります。これが言葉であります。誰の言葉がいいのかといいますと、やはりお母さんの言葉がいいのです。子どもはメキメキと言葉の能力、感覚を高めていきます。それで人間らしくなっていきますから、これを母乳語という名前でよびます。

惣領の甚六

どうせお母さんが子どもに話しかけるのなら、赤ん坊のためになる、赤ん坊に好都合な言葉をしゃべった方がいいのではないかと思います。この母親が乳幼児と交す言葉の研究が非常におくれていまして、どういう言葉をお母さんは赤ん坊にしゃべればいいかということがよくわかっておりません。しかしお母さんは二人、三人と子どもを育てますと、だんだん上手になります。未経験な母親の子どもは被害をうけるわけです。昔の人はそれを〝総領の甚六〟といいました。若い親の子どもは成熟していないから抜けて

いるんだということを考えていたようです。が、これは間違いで、お母さんの経験が無いために母乳の言葉、心の糧が不足しますから、いつまでたっても精神的発達が進まない、おくれるわけです。昔からそういうことはかなりあった。ただ最初の子どもが女の子ですと割合にうまくゆくので、昔から〝一姫二太郎〟という。これは一人の女の子、二人の男の子ととる人もあるようですが、私は、最初女の子で次が男の子ととる方がいいように思います。男の子は女の母親からうける言葉になじまないのでしょうか。男の子は病気にかかりやすくまた治りにくい。言葉をしゃべるのが遅い、女の子はおしゃべりだから早くしゃべるというようなことを言っていますが、なぜおしゃべりになったかというと、小さい時の教育が、早く母乳語をたくさん取って、その母乳語が女の言葉であるために女性にはプラスになる。だからたいてい、女の子の方が男の子より早くしゃべるようになる。甚子さんがあまりできないというのは、お母さんと娘の間では言葉の教育が割合にうまくゆくからでしょう。

ソ連では託児所が発達しております。働くお母さんたちはそこへ子どもを預けて働いているわけであります。その託児所は衛生的に完備しており、普通の家庭では見られないような設備だそうです。ところがその託児所の子どもは一般の子どもよりはるかに病気にかかりやすい。そしてかかるとなおりにくい。こういう衛生的なところに子どもをおいておけば病気にならない、のではなくて、子どもにはもっと愛情、心の糧を与えて精神を安定にする必要がある。母親のところへ行きたいという気持ちをおこさせないで、みち足りた精神生活をおくらせれば抵抗力も強くなって、病気になりにくいのです。かりにいくらかばい菌のあるような所にいても病気にかかりにくく、かかった病気もじきになおる。ところが精神的なものが欠如しているところに育つと弱くなるわけです。

男の子、ことに総領の男の子が甚六ぐらいですんでいればまだいい方であります。ひょっとするとお母さんの育て方が悪くて死んでしまう子がたくさんあるはずです。生き残ったのが甚六、というわけです。昔のように子どもが十人も一ダースもあれば、最初の方が三振してもあとでとりかえせば打率七割ぐらいのいいお母さんになれるかもしれません。しかし最近のように子どもの数が一人か二人、三人となりますと、最初失敗したら二人の場合は五〇%、もし一人の場合は一〇〇%失敗になります。昔よりもお母さん方の研究は大事であります。

幼稚園においても先生は大部分が女性であります。したがって男の子が入ってきた時に男の子と先生の間に一種の緊張感がある

はずであります。そのことについて現在の幼稚園の教育がどの程度の配慮を払っていらっしゃるか、先生方がどういう研究や努力をしていらっしゃるか、私は存じませんが、母親のところですでに男の子はかなりひどい目にあっているのです。幼稚園に来たらまたその母親の代理みたいな人がいて、どうもあまりピッタリしない、しかし女の先生は男の子を非常にかわいがりますから、それで救われているのです。

栄養のある母乳語

さて同じお母さんの言葉でも、栄養のある言葉と栄養のすくない言葉があります。大きくなって俗に頭のいい子といわれる子どもは、栄養の高い母乳語をたくさん聞いてきている子どもであります。ただのおしゃべりのお母さんでは賢い子どもが育たないのは、おしゃべりに栄養がなければ、馬がわらを食べているようなもので、腹はふくれても栄養にならないのです。どういう言葉を子どもに話してやれば栄養の高い言葉なのか、これは非常に難しいところであります。そしてそれがその子どもの将来の才能を決定してしまいます。この点で最近困ったことは、お母さんたちの教育的水準があがってきたということです。元来ならばこれは喜ぶべき現象でありますが、母乳語の先生としてのお母さんを考えますと、形式的学校教育の水準が高まったということは、子どもにとってまずいことであります。なぜかといいますと、昔のお母さんが決して口にしなかったような言葉を、今のお母さんは平気で口にします。〝結論的には〟とか〝主体性〟だとか〝何とか主義〟だとか、こんな言葉は赤ん坊にとって全く意味がないのであります。赤ん坊にとって栄養価が高いのは〝おいしい〟とか〝まるい〟とか〝まがっている〟とかの〝耳の言葉〟でなければいけません。ところが学校では難しい漢字のたくさん書いてある本を読んで勉強いたします。そういう勉強の期間が長くなればなるほど、しらずしらずしゃべる言葉の中に〝目の言葉〟、観念的な言葉がまじってきます。赤ん坊は字を読むことはできないのですから、どんなに意味があっても目で見なければわからない言葉は騒音と同じであります。ところがお母さんたちは、自分たちは教育を受けているんだから、知識があるんだから、という誇りがあります。目の言葉に関しての反省はありません。それで今の子どもは、昔の子どもより不幸であるといえると思います。ことに高等教育を受けたお母さん方は、栄養価の高い母乳語とは何であるかということに真剣にとりくまないと、折角の自分の教養があだになってしまいます。

言葉を覚えるということ

言葉というのはどうして覚えられるのかということをついでに申し上げておきます。言葉というのは、言葉の中に意味があるのではないのです。言葉に意味があるのですが、初めから意味をもっているわけではありません。どんなに頭がよくても一回で言葉を覚えた人というのはかつて存在しないのです。言葉はくりかえしによって覚えます。赤ん坊が二年くらいの間言葉が使えないのは、そのくりかえしの回数が十分多くなるのに時間がかかるからであります。たとえば、ママとパパという言葉を覚えるのには、(これは一番早いと思いますが) 何百回もこれをくりかえして聞かせますと、これが何かをさすらしいということがわかってきて〝ママ〟というとママの方を向くようになります。大人になりますと一度きいたことをすぐ記憶するということがありますが、これはたくさんの言葉を知っていて、その言葉を関係づけるからわかるのです。外国、たとえばアフリカのタンザニアへ行って最初にきいた言葉を〝あれは何という意味ですか〟と聞かれてわかる人がいたら、それはお化けです。しかしわからなくてもその国に六か月いれば大抵の人はその国の言葉を覚えてしまいます。ことに子どもですと六か月すると完全に言葉を覚えますが、それはその国に必要な頻度、くり返しがあるからであります。

したがってお母さんが言葉をあれこれふらふらさせていたらだめなのです。玩具もあまりいろいろなものを買い与えてはいけないといいますが、あれも玩具は大人はひと目見ればこれは何であるかわかりますが、子どもには、毎日毎日同じものをながめて、そのくり返しがだんだん重なってくると、これは太鼓であるなということがだんだんわかってくるのです。それが十分まだ頭に入らないうちにそれをとって新しい玩具をやれば、いつも混乱して、定着しないわけです。言葉を教える場合もそうでありまして、なるべくたくさん言葉を教えればいいと思って新しい言葉をあれこれ与えますと、必要なくりかえしに達しない。するとその子どもは言葉をしゃべるのがおくれてしまいます。

しゃべるのが遅れるというのは、その時点において知能にある遅れがあるということを示しておりますから、これは相当重大であります。なぜそうなってしまったか。先天的ではなくて後天的に言葉の教育が間違っているからです。お母さん方は生まれたばかりの赤ん坊に自然に口にできるような言葉を、一日に十ぐらいの言葉をくり返しくり返し使っていたら、まず二年以内に必ず言葉がいえるようになるはずであります。赤ん坊はくり返しの多い

言葉から覚えていきますから、そして最初に覚えた言葉ほど重要性が高いのですから。テレビをつけておきますと、周期的に同じコマーシャルがきこえますが、赤ん坊はこの世の中で一番大事な言葉は〝何とかラーメン〟〝何とかコーヒー〟だというようなことを考えても、致し方がないのです。

このくり返しということは努力なくしてはなかなかできることではありませんが、普通は母親が一番くり返しをよくやります。これは子どもがかわいいからであります。もっとも子どもが大きくなりましてもまだ同じことをくり返しておりますから、子どもから〝うるさい、お母さん同じことばっかり、もうわかった〟といわれる。が、そういうおかげで子どもは育てられたのです。くり返しをうるさがるなどというのは罰当りであります。

慣用——言葉の意味づけ

しかし言葉は一にも二にもくり返し、くり返せばいいというので、朝から晩まで〝まんま、まんま、まんま〟といっていたって、これは騒音みたいになってしまいます。適当に間をおいてくり返さなくちゃいけません。一日に何回かやるというように時間をかけなくてはいけません。くり返している間に慣用ということができます。この慣用ができた時にその子どもにとって言葉は意味を持つようになります。言葉というのは初めから意味があるのではなく慣用によって言葉がわかり、その言葉には意味がついてくるわけです。かりにここで人造的に〝ポコポコペッ〟という言葉を作ったとします。ある家庭で「〝ポコポコペッ〟といったらご飯ですよ」ときめておきます。そして毎日〝ポコポコペッ〟とくり返していますと、その内に子どもは〝ポコポコペッ〟というと唾液が出てきてああ腹がへった、というふうになります。それもやっぱり十回や十五回じゃだめで、一年も二年もいってますと、それはよその家庭では何も意味をなしませんが、そこの家庭では〝ポコポコペッ〟といえば〝あ、ご飯だな〟とすぐわかります。〝いわしの頭も信心から〟と申しますが、いわしの頭を玄関の所へつるしておく、いわしの頭はいわしの頭です。しかしこれを毎日見て何となくありがたいような気持ちで眺めておりますと、このいわしの頭にも慣用ができて、そのうちにいわしの頭を見ると何となく神秘的な感じがして、神さまか何か宿っているんじゃないかというような気持ちになったりします。

よくしつけを大事にしなくてはいけないといいます。しつけといっても一ぺんでアイロンをかけるようなしつけもできますが、昔の人のしつけというのは、へらで何回も何回もくせをつける、

一種の慣用をつくることです。

先ほどちょっと〝パパ〟という言葉はよろしくないと申しまして疑問を残しておりますので、なぜいけないかということを申します。〝パ・パ〟という言葉は破裂音であります。日本語は長い間この破裂音、パピプペポは使いませんでした。なぜなかったかというのは大変興味ある別の問題ですが、外国語が影響を与えるようになってこのパピプペポが入ってまいりました。日本語としてはいわば新参の音であります。辞書を引いてみますと、パで始まる言葉にろくな言葉がありません。パア、パクル、パサパサ、パンパン、パチパチ、パッパッとか、感じはよく出ますが日本人にははしたない、落ち着きのない、安定性の欠けた感じがします。そういえばパパというのは、朝いたかと思えばパッとどこかへ行っちゃう、夕方来るとパッとまた寝ちゃう。パッパッと消えちゃう。大きくなってから父親との心の交流をはからなくちゃいけないなどということをいっても空々しいわけであります。三つ子の魂で父親はもう否定されちゃっています。パッパッ、いなくてもよろしいということです。これは教育上よろしくないのです。道徳教育としてでなく言語教育としてもよろしくない。その上に子どもは割合音に敏感でありまして、昔からあんまり子どをおどかしてはいけない、虫がひきつけるとかいわれています。ところが言葉の中で一番おどかすのは破裂音です。ですから小さい子どもと隠れん坊をする時〝いないいないバァーッ〟という人はいません。〝いないいないバァーッ〟です。〝バァーッ〟というのはおだやかで、破裂音としてもソフトな音です。昔の人たちは理屈は知らなかったのですが〝いないいないバァー〟といったのはよろしいことです。ですから私は〝パパ〟よりも〝ババ〟の方がいいと思いますが〝ババ〟というのは既に存在するものなので、ちょっと困ります。

（つづく）（お茶の水女子大学）

（一九七五・七　日本幼稚園協会夏期講習会講演より）